

『人間工学からの発想』が与えてきたもの

千葉工業大学工学部デザイン科学科

1325115 滝口 亜美

この本との出会いは、大学2年の人間工学の授業だった。この本を読み始める前は、「人間工学」というものが一体どういうものなのかを実際のところちゃんと理解していたわけでは無かった。しかし、この本を読んだ後、人間工学の本当の意味が今まで自分なりに理解していた人間工学とは異なっていたことに気づいた。それから約1年後。この本を再度読むことにより、新たな気づきや発見を得ることが出来るのではないだろうかと思ひ、この本を選んだ。また、この本は以前千葉工業大学の理事を務めていらっしやった小原二郎先生による執筆で、千葉工業大学の学生である私はとても身近に感じて読んでみようと思った。

約1年前のレポートを見返すと、私は最初に次の文章の重要性を示していた。「使いやすくするところと、使いにくいまま残しておくところとの領域をはっきりさせることが、人間工学を応用するうえでの一つの重要なポイントといってよい。」という文章だ。それは、決して過保護になり過ぎてしまっても良くないということだ。それまで使いやすくするのが人間工学であり、使いにくさは全て取り除く必要があると思っていた私にはとても衝撃的だった。そして約1年後、改めてこの本を読んだ際にやはり私は同じ文章にするしをつけていた。実際のところ、この文章を私は忘れてしまっていた。だが、再度読んだことにより、それを思い出すことができた。

更には、もう一つ重要なことに気づいた。それは、「ほどほどの使いにくさに設計するには、どうしたら使いよいかということが、よほどよく分かっているなければできないことである。」という文章である。文章としては簡単に書かれているが、よく考えるとなかなか難しいことである。それはおそらく、設計していつてある程度使いやすくなったけど使いにくいところがまだ残っているということではなく、そのものの使いやすさを十分に理解している上で、あえて使いにくさを残すということなのであると思ひ思う。そう考えると、人間工学を応用して設計することはとても難しいことであると改めて今回実感した。このように、新たな気づきがたくさん出てきたのである。

次に、私は人間のパーソナルスペースについて着目していた。パーソナルスペースは

文字からすると「パーソナル」だけで人間だけが対象のようにも感じるが、実は、全ての動物が共通にしてもつ習性である。これも今回読んだことによる新たな気づきである。パーソナルスペースは生活の中でよく感じる場面がたくさんある。例えば、授業で使う机に対する椅子の数。私が高校生のときは、長テーブルに3人が座るような状態だったが、3人だととても人間同士の距離が近く、全く集中出来なかったことを今でも覚えている。このような問題が起きてしまったのには、2つの問題があると思う。一つは、教室の大きさ上、入る机の数が限られてしまい、結局、机もギリギリなため、椅子もギリギリになってしまっていた。二つ目は、長テーブルの長さの問題があったということである。これに関しては、長さが短かったのではないかと考えられる。どちらの問題もパーソナルスペースを考えれば、少しでもよくなるのではないだろうか。

これらの問題に対して気を付ける点としては、高校生などは思春期まっさかりで男女を気にする年頃である点やノートや教科書を広げたときのスペースを含める点などが考えられる。本の中に「人間には固有の空間を占有したいという本能がある」とある。本能を変えるということは不可能に近いので、ものが人間にアプローチしていかなければならないと思った。

三つ目に、約1年前は良いベッドの硬さについて注目していたが、今回は次の文章に注目した。「残念ながらわが国では、ただふんわりとして柔らかければ、それがよいベッドだと信じている人がまだまだ多い。」という文章である。残念ながら私もそのように感じる。むしろ、私自身も本当に良い硬さというのが分からないというのが本音である。そのような状況になってしまったのも、寝具に対する意識が低かったり知識が無いため、上の文章のように信じている人が多いと考えられる。たくさんの人に理解してもらうのもなかなか難しい問題である。

ユーザー側は少なくとも、柔らかいだけでは人間にとって快適な睡眠を促す寝具にはなり得ないということだけでも頭に入れておくことで、寝具の見方がガラリと変わると思う。設計する側は、人間の身体の動きや重力の関係も含めて考えることは大前提であるが、工学的にしっかりと評価出来る人間になる必要もあると思う。しっかりと評価できる人が設計したものはやはり説得力があり、良い寝具が出来上がるだろう。

最後に、今回私は約1年前に読んだ本を再度読んで、新たな発見や気づきを多く見つけ、忘れてしまっていたこともたくさん思い出すことができた。ものも同じように、今

あるものが本当に人間にとって使いやすいものなのかを見つめ直してみると、新たな発見や欠点が必ず出てくると思う。また、一つの分野に限らず様々な分野の知識を知った上で再度考えてみると新しい組合せや可能性も出てくるかもしれない。何か欠点が見つかった時には、人間工学からの発想を応用してみると、大きな何かを得ることができるだろう。

本：『人間工学からの発想 クオリティ・ライフの探究』小原二郎
株式会社講談社